

コンスタントな雪と厳しい寒さが連日続き、春の訪れが停滞気味なこの頃です。まだまだ、白い世界が健在で、連日子どもたちも雪遊びを堪能しています。その分、子どもたちの顔は薄黒く雪焼けしてきており、冬を満喫しているという感じです。

あっという間の2月でした。本当に雪を満喫したという月でした。何と言っても、冬の大イベント 戸隠鏡池クロカンが、今冬1番の冬の天候でした。奥社入口の蕎麦屋のスタッフの人達も「今年1番の大荒れの天気だ」「本当に行くの?」と驚かされていました。ちなみに気温は-9度でした。全員 無事に帰って来たからほっとして言えますが、まさに冬山の天気です。一歩間違えば(誰かがけがをする、低体温症になるなど)新聞沙汰になるほどの天候でしたので、主催者としては、かつてないほど、実は覚悟して緊張していました。全員、無事戻ってきた時は、本当にほっとしました。幼児を連れての雪山は、普段の保育以上に、状況判断やスピーディな行動が求められ、それを実践して楽しんでもしまう大地の家族の人達は、素晴らしいと思いました。大人が適格な判断を誤らなければ、大地の家族でしたら、相当の悪条件でも楽しむことができるでしょう。

子供たちも、冬の天候が悪いからと外遊びを、1度も敬遠したことはないのです。子どもたちはしたたかです。そんな子どもたちと付き合うには、大人も様々な厳しい自然条件の中で鍛錬して、自然の流れを学び、したたかな遊びを一緒に共有すると、素晴らしい感動と忘れることができない思い出ができるでしょう。その意味では、今年の鏡池は、滅多に味わえない体験でした。



さて、3月もまだまだ雪があります。どんな雪の世界を味わいながら、春を待つことでしょうか。

【新聞配達】

我が家の末っ子の中3の受験生も、いよいよ大詰めを迎えている。そして、中学からトレーニングを兼ねて行ってきた新聞配達も、この2月で終わることになった。できれば、受験日までやらせたかったが、さすがに、この父も甘くなり、新聞配達が終わっても、同じ時間に起きるという約束をして、終了を認めた。

思えば、新聞配達は本当に厳しい。普段、四季の移り変わりが美しく、それぞれの厳しさ、美しさを味わえる里山の飯綱町を自慢しているが、雨や風雪も関係なく1年中、同じ時間に出ていく新聞配達の身にとっては、特に、雨や冬の時期はとてつもない。子どもの野球の合宿の時などは、親が代わりに配達したが、私自身は朝早く起きるには問題ないが、一人で冬 -10度を超える中を出ていく時の気持ちは、やはり覚悟がある。自分の小さい時は、新聞配達の人々の声を聴いていた。(当時はポストはなく。玄関を開けて、土間に置いてくれた記憶があり、「新聞です」「ご苦労様」のやり取りが必ず朝あった)

だが、今は、全部がポストであり、まだ誰も起きておらず、無人の世界を配達している状況が多い。昔のように「ご苦労さま」と声をかけてくれる人もいない。

息子が新聞配達を始めた頃、冬になるとポストの下に、発砲スチロールの箱があり、ここに暖かい缶コーヒーが置いてあり、息子は飲んでいたようだが、その家の暖かい気持ちがありがたかった。息子にはかけがえのない人の情けを感じたことであろう。(毎朝、成長期の子供が缶コーヒーを飲むのは問題あると思い、その後は丁重にお断りした)

また、最初の頃、数種類ある新聞の整理に慣れずに、地面に置いて整理している所をお客さんに見られ、大切な新聞を地面に置くとは何事だ と叱られ、契約を解除されて、新聞配達店に謝りに行き、そのお宅にお詫びの手紙を書いて配達したこともあった。

何と言っても、家族で忘れられないのは、最後の一軒を配り、そのまま小学校のグラウンドへ走ってきて、親は軽トラで野球道具を積んで待ち合わせ、ここで2年間 真冬の雪のある時を除き、毎日一緒にノックやトスバッティングやキャッチボールをしてきたことである。時には、妻や兄弟も付き合った。このグラウンドから見る景色、校舎、グラウンド等は、こんな機会でもなければ見る事が出来なかつただろう。小学校の門、松並木、景色は、約45年前に私が小学校へ入学した頃とは変わっていない。4人の子どもたちも、この学校 グラウンドで過ごした。今は、お話で、私たちも小学校へ通い続けている。まさに、このグラウンドは、私達の人生の一部であるような気がする。新聞配達をしていなかったら、こんなにも小学校へ通うつめなかつただろう。

息子は、小4から、今の新聞配達のコースを毎朝、走り始めた。その頃、私も自転車を始めたので、一緒に自転車に伴走した。日が経つにつれて、道行く車、出会う人と毎朝 ほぼ同じ場所で会い、挨拶するようになった。その道を、新聞配達で走った。そう思うと、この道は、かれこれ6年近く走ってきたわけだ。この道も、この道からの景色も私達家族にとっては忘れられないものとなるであろう。

新聞配達の景色。朝焼けに染まる北信五岳、志賀高原の山並みからの朝日、春風が吹きお花が咲く庭への配達、セミが鳴き始める朝、紅葉の道路、そして、凍結して膝まで埋まる中をラッセルして行く道。どれもが、いい思い出になるようにしている。嬉しいことに、息子は、自分で言い始めた新聞配達だけに、一度も頼むから代わってくれとか辞めたいとか言わなかった。(そんなことを聞き入れる親とは思っていないからであるが) お休みも、年に10回足らず。親も、特に、冬場などはかわいそうだと思ったことは何度もあったが、見て見ぬふりをするのがしんどいこともあった。雪が一晩に30~40センチ積もり、しかも猛吹雪。こちらも懸命に除雪機(暖房付のブルドーザー)を動かして除雪している横を、リュックを担ぎ、雪だらけになりながら歩いて行く姿を見るのがつらい日もあった。が、いい人生経験だ、根性がつくだろうと、必死に自分に言い聞かせていた。除雪が終わりほっとしても、やはり息子が帰ってくるまでは心配だった。自分の除雪に比べたら、新聞配達の方が、はるかに辛い事だろうと思った。

今年になり、受験が本格化して、毎週木曜日は、甘い親だが、お休みにして、私達夫婦が代わりに新聞配達に行くことにした。木曜日の朝は、いつも2人で、息子の軌跡を感じる時となっている。この道、この家 この景色 この空気この世界、どんなことを感じ、どんなことを心に刻み、将来、どんな思いとして残るのであろう。この息子と辿ったこの時間、この期間は、かけがえのない青山家の歴史、思い出となった。毎日、継続して行う事、ひと時の体験や旅行などとは違う、継続性のある自然と共に暮らした世界 期間 言葉では言い表せない大きなものがある。

新聞配達の卒業式は中学時代の大きな結晶である。新聞配達は、青山家の大きな1時代のドラマであった。今、新聞配達を終えることは、ただたださびしいだけである。息子よ、新聞配達を誇りにして生きろ。